



NEWSLETTER No.46

Organic Geochemistry

The Japanese Association of Organic Geochemists

日本有機地球化学会

2008.1.28

Report

第 25 回有機地球化学シンポジウム(2007 年金沢シンポジウム) 開催される

第 25 回有機地球化学シンポジウム (2007 年金沢シンポジウム) は 2007 年 7 月 26~27 日にかけて金沢大学サテライトプラザ (金沢市) にて開催されました。参加者数 67 名 (一般 46 人、学生 21 人) 口頭発表件数 26 件 (うち特別セッション 6 件)、ポスター発表件数 18 件でした。世話人をしていただいた長谷川卓会員ほか金沢大学の方々にあらためて御礼を申し上げます。



2006 年 7 月 26 日 金沢大学サテライトプラザ前にて



会場風景

懇親会風景

2007 年度有機地球化学会 学術賞、研究奨励賞(田口賞) 受賞者決まる

2007 年度有機地球化学賞（学術賞）は、選考委員会で審議された後、7 月 25 日の運営委員会で井上源喜会員に贈ることが承認されました。そして翌日開催された 2007 年度総会後に表彰式が行われ、賞状と記念メダルが田上会長から井上会員に授与されました。おめでとうございます。

有機地球化学賞（学術賞）第 8 号

井上 源喜 会員

受賞研究「南極大陸マクマードドライバレーの有機地球化学的研究」

推薦理由

南極大陸は南極半島の北部を除き維管束植物の存在しない特異な地域である。井上（松本）博士は、1976 年以来南極南ビクトリアランド（South Victoria Land）のマクマードドライバレー（McMurdo Dry Valleys）の調査に 5 回参加し、世界に先駆け南極大陸における有機地球化学的研究に着手した。マクマードドライバレーは南極最大の露岩地帯で、ビクトリア谷、ライト谷およびテイラー谷の 3 本の谷が東西に走り、谷底にはバンダ湖やボニー湖などの湖沼が点在する。後背地には南極横断山脈（Transantarctic Mountains）が位置し、ゴンドワナ大陸時代の石炭や珪化木を含むビーコン累層群（Beacon Supergroup）が分布する。現在、南極大陸は南極半島の北部を除き維管束植物が存在しない特異な地域であるが、新生代（Miocene-Pliocene）には、マクマードドライ

バレーには大変興味を持たれる。

井上博士はマクマードドライバレーや昭和基地周辺の湖沼水・堆積物、土壌、生物試料、岩石および岩石内微生物群の有機成分を中心とした地球化学的研究を実施し、約 70 編の論文を発表した。また、現在も南極の有機地球化学的研究を継続している。

以上のように井上源喜会員は、日本の南極研究や有機地球化学的研究の発展に大いに貢献しておられることから、有機地球化学賞（学術賞）第 8 号受賞者に推薦した。

（有機地球化学賞（学術賞）選考委員会）

2007 年度研究奨励賞（田口賞）は、1 件の自己推薦を受け、選考委員会で審議された後、メールにて開催された運営委員会で藪田ひかる会員に贈ることが承認されました。2007 年度総会の席で表彰式が行われ、賞状と副賞 5 万円が藪田会員に送られることになりましたが、現在藪田会員は米国カーネギー研究所にて博士研究員として勤務中で総会に参加できなかったため、代理で奈良岡会員がこれらを受け取り、その場で藪田会員に国際電話で受賞が報告されました。おめでとうございます。

研究奨励賞(田口賞)第 10 号

藪田 ひかる 会員

受賞研究「種々のスペクトル手法によるケロジェンおよび隕石中不溶有機物の解析」

選考委員会所見

藪田ひかる会員は、卒論研究から現在（博士研究員）までの約 10 年間で、論文 11 編（英文 10 編、日本文 1 編；うち筆頭 5 編（そのうち 4 編は国際誌）；現在さらに国際誌に 2 編投稿中）を公表し大変に活発な研究活動が続けている。また、学会発表でも、国際学会 16 件、国内学会 22 件と高いアクティビティを保っており、2005 年には、The 14th International Congress of Origin of Life でベストポスター賞を受賞している。藪田会員は、これまで優れた研究を行い、将来にも研究の発展が期待できる有望な若手研究者であると判断され、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しい。



バレーに維管束植物が分布していたという報告もある。このような地域における有機成分の特

以上のことから、藪田ひかる会員を研究奨励賞（田口賞）第9号に推薦した。

（日本有機地球化学会研究奨励賞（田口賞）選考委員会）

尚、有機地球化学シンポジウム(2007年金沢シンポジウム)のポスター賞は、岡山大学 金子雅紀氏が受賞されました。受賞研究「北東太平洋Cascadia Marginにおける堆積物中のCNS元素および脂質バイオマーカーの同位体的特徴」



藪田会員に受賞の報告をする奈良岡会員

「2007 年度総会」議事録

日 時:2006 年 7 月 26 日(木)17:00～18:00

場 所:金沢大学サテライトプラザ 3 階集会室

議事

1. 承認事項

以下の議題について、事務局および田上会長から報告がなされ、多数の賛成を得て承認された。

(1)2006 年度事業・会計報告

a. Publication 関係

- ・ ニュースレターNo.42（2006.1.16）、 No.43（2006.6.2）発行
- ・ ROG Vol. 21 発行（2005.12.26）

b. Meeting 関係

- ・ 第 24 回有機地球化学シンポジウム（2006.8.3～8.4; 信州大）
- ・ 総会（2006.8.3; 信州大）
- ・ 運営委員会（email で随時、2006.8.2; 信州大）
- ・ 学術賞受賞候補者選考委員会（2006.7; email）
- ・ 田口賞受賞候補者選考委員会（2006.6; email）
- ・ ROG 編集委員会
- ・ 30 周年記念事業（地球・環境有機分子検索マニュアル作成）WG

c. 事務局関係

- ・ 事務局運営会議（2006.6.14）
- ・ 会計処理
- ・ 会員管理
- ・ ホームページの更新

d. 会計実績：資料 1 参照

e. 2006 年度会計監査報告

有機地球化学会および田口基金の 2006 年度会計報告を、出納簿、領収書、郵便料金受領

書、その他提示された証明書類に基づいて審査した結果、それが正確に処理されていると認められましたので、ここに報告致します。

平成 19 年 7 月 6 日

監事 山本 修一 印

(2)2007 年度事業・会計中間報告

a. Publication 関係の上期事業実績

- ・ ニュースレターNo.44（2007.2.14）、No.45（2007.6.6）発行

b. Meeting 関係の上期事業実績

- ・ 運営委員会（email にて随時）
- ・ 学術賞受賞候補者選考委員会（2007.6; email）
- ・ 田口賞受賞候補者選考委員会（2007.6; email）
- ・ ROG 編集委員会
- ・ 30 周年記念事業（地球・環境有機分子検索マニュアル作成）WG

c. 事務局関係の上期事業実績

- ・ 事務局運営会議（2007.4.11）
- ・ 会計処理
- ・ 会員管理
- ・ ホームページの更新

d. Publication 関係の下期事業計画

- ・ ROG Vol. 22 発行
- ・ ニュースレターNo.44 発行

e. Meeting 関係の下期事業計画

- ・ 第 25 回有機地球化学シンポジウム（2007.7.26～7.27; 金沢大）
- ・ 総会（2007.7.26; 金沢大）
- ・ 運営委員会（2007.7.25; 金沢大、email）
- ・ ROG 編集委員会
- ・ 30 周年記念事業委員会
- ・ 将来計画委員会

- f. 事務局関係の下期事業計画
 - ・事務局運営会議（2007.7.18、他）
 - ・会計処理
 - ・会員管理
 - ・ホームページの更新
- f. 会計の中間報告：資料 2 参照

(3)2008 年度事業・会計計画

- a. Publication 関係の事業計画
 - ・ニューズレターNo.46、 No.47 発行
 - ・ROG Vol. 23 発行
- b. Meeting 関係
 - ・第 26 回有機地球化学シンポジウム
 - ・総会
 - ・運営委員会
 - ・ROG 編集委員会
 - ・30 周年記念事業委員会
 - ・将来計画委員会
- c. 事務局関係
 - ・事務局運営会議
 - ・会計処理
 - ・会員管理
 - ・ホームページの更新
- d. 会計計画：資料 3 参照

(4)名誉会員規定の変更および名誉会員選定

- a. 名誉会員規定運用のため、以下の細則を設ける。
 - ・名誉会員資格は以下の通りとする。尚、会長を含む事務局で相談し、会長の発議により運営委員会で候補者を審議・決定し、最終的に総会で承認を得る。
 - 1) 本会の有機地球化学会賞や他の有機地球化学やそれに関連する分野の賞の受賞者。
 - 2) 本会の「会長および副会長」経験者。
この 2 つにいずれかを満たし、現役を退いている者。
 - 3) ないし運営委員会において適切と認められた者。
- b. 今年度は会長経験者である、相原安津夫さん、秋山雅彦さん、下山晃さん、石渡良志さん、の 4 名を名誉会員として総会に推薦。
- c. 会則の第 4 条を、手続き簡素化などのため、以下のように改定する。
 - ・主文：現会則「本会の会員は次の 3 種とする」→新会則「... 次の 4 種とする」

- ・現会則：「名誉会員：有機地球化学または関連する分野において顕著な功績を有し、本会の発展に貢献した個人で、総会において承認される」→新会則：「... 個人で、運営委員会で審議・承認し、総会に報告する」

(5)役員改選規定の変更および役員改選

- a. 会則の第 11 条を、現規定にある、任命の時期が規定されておらずまた任期に柔軟性がない、という問題を解決するため、以下のように改定する。
 - ・現会則：「役員の任期は 2 年とする。但し再選は妨げない」→新会則「役員の任期は原則 2 年間とし、総会での承認をもって任命する。また再選は妨げない」
- b. 役員を改選し、以下の体制とする（添付 4）。

2. 報告事項

各委員会および事務局から以下の報告がなされた。

(1)学術賞選考結果報告（報告者：平井委員長）

- ・受賞者：井上源喜会員
- ・学位：理学博士
- ・所属：大妻女子大学 社会情報学部（教授）
- ・研究題目：南極大陸マクマードドライバレーの有機地球化学的研究

(2)田口賞選考結果報告（報告者：三瓶委員長）

- ・受賞者：藪田ひかる会員
- ・学位：理学博士（筑波大学）
- ・所属：米国カーネギー研究所 博士研究員
- ・研究題目：種々のスペクトル手法によるクロジェンおよび隕石中不溶有機物の解析

(3)ROG 編集状況（報告者：奈良岡委員長）

- ・現在、4 編の原稿を受付、既に 3 編が受理済みである。
- ・ROG Vol. 22 は、さらに原稿を増やし 12 月に出版予定である。

(4)記念事業の進捗状況（報告者：山本委員）

- ・事業は 5 年目を迎えており、既に 14 編を ROG に発表している。
- ・これらを 1 冊の本にまとめると既に 100 ページ以上となるが、さらに 10 編前後の原稿を 2～3 年にうちに集め ROG に発表した

後、本にまとめる計画である。

(5)来年度のシンポジウム開催場所（報告者：事務局）

a. 経緯

- ・ 6/11 に事務局から主催者を公募。同時に運営委員に対しても依頼し、島根大が立候補。
- ・ 但し、島根大は3回目の主催なので事務局が他の受入先を検討し、名古屋大に打診し快諾。

b. 運営委員会案

- ・ 2008 年度は名古屋大に依頼する。
- ・ 立候補のあった島根大は 2009 年度の第一候補とする。

c. その他

- ・ 今後の開催ルールについて事務局を中心に議論を進める。ポイントとしては、1) 輪番制にするのか、2) 地方と首都圏の隔年開催に戻すのか、などがある。

(6)日本化学連合会への不参加について（報告者：事務局）

- ・ 6/18 に「日本化学連合会へのご参加の呼びかけと設立総会へのオブザーバー出席」の依頼が届く。参加にともなう分担金は会員一人当たり 70 円とのこと。
- ・ 会長および事務局で相談し「参加せず当面は静観する」との方針案を決定。その理由は以下の通り。
 - 1) 日本有機地球化学会は大きな学会ではない。
 - 2) 化学よりも地球惑星科学から発している学会である。
 - 3) 会員一人当たり 70 円とは言え、財政状況から考えて分担金の負担は小さくない。
 - 4) 国から補助金をもらっていない学会なので参加のメリットがない。
- ・ 運営委員会に 6/22 上程し、異議なしとの審議結果で 7/4 に承認を得た。

(7)会員の現況（報告者：事務局）

a. 入会：8 名

- ・ 正会員：三田 肇、山田奈美葉、宮田善佳樹、柏山祐一郎（4 名）
- ・ 学生会員：山本真也、田中孝典、菊地 徹、重光雅仁（4 名）

b. 退会：3 名

- ・ 正会員：池原琴絵、重川守（2 名）
- ・ 賛助会員：ジャスコインターナショナル（1 社）

c. 除籍：1 名

- ・ 正会員：福沢仁之（1 名）→2001 年より未納

d. 現況：161 名

- ・ 正会員：133 名
- ・ 学生会員：25 名
- ・ 賛助会員：3 社

(8)学会の財政状況の変遷について（報告者：事務局）

a. 学会の財政状況についての現状認識

- ・ 繰越金は、1999 年度には 134 万円積み立てられていたが、現在の試算で 2008 年度末には約 50 万円に減る予定。平均して年間約 10 万円ずつ減っている計算になる。
- ・ 一方で、現在 ROG を 200 冊作っており単価は約 2000 円。したがって正会員から頂いた会費はほとんど ROG でなくなっている。
- ・ 出費の大きい ROG 印刷費については、印刷所を変更することにより一時減った（2004 年度に 10 万円減）が、表紙のカラー化により元のレベルに戻っている（35～40 万円）。
- ・ ROG 作成費以外に 10～15 万円／年の費用がかかっており、これが捻出できないと繰越金は減って行くことになる。特に、HP 維持費（5 万円／年）、事務局経費（3 万円／年）、シンポジウム予備費（4 万円／年）が大きい。
- ・ 2006 年度は、1) 過去のシンポジウム剰余金の一般会計への組入れ（約 11 万円）、2) シンポジウム協賛金（4 万円／年）などの収入、により一時的に財政が持ち直している。しかしこれらは流動的で繰越金減少を中長期的に食止められない。

b. 対応策およびご協力をお願い

- ・ 将来計画委員会、事務局、運営委員会を中心に、対応策を協議・実行して行く予定。具体的には、収入増加策として、1) 賛助会員の勧誘、2) シンポジウムでの企業協賛の勧誘、経費削減策として、ROG 作成費の削減などが考えられる。
- ・ また会員の協力も不可欠であり、遅延ない会費の支払いを依頼した。

資料１：2006年度の会計報告（2006年1月1日～2006年12月31日）

一般会計

大項目	小項目	2006年度			
		予算	決算	増減	コメント
収入	賛助会費	140,000	40,000	-100,000	請求遅れ
	個人会費	225,000	218,000	-7,000	
	ROG販売	2,000	2,000	0	
	シンポジウム剰余金	0	152,423	152,423	過去剰余金＋松本協賛金
	利子	30	60	30	
	計	367,030	412,483	45,453	
前年度繰越金		969,729	747,351	-222,378	05/ROG印刷費＋HP維持費
総計		1,336,759	1,159,834	-176,925	
支出	ROG印刷費	270,000	0	270,000	次年度支払い繰越し
	送料	30,000	14,230	15,770	
	HPオンライン化維持費	62,000	53,970	8,030	
	シンポジウム予備費	0	0	0	
	事務局経費	30,000	0	30,000	
	雑費	5,000	22,073	-17,073	
	計	397,000	90,273	306,727	
次年度繰越金		939,759	1,069,561	-129,802	
総計		1,336,759	1,159,834	176,925	

田口基金

大項目	小項目	2006年度			
		予算	決算	増減	コメント
収入	利子		5		
前年度繰越金			1,894,202		
総計			1,894,207		
支出	副賞(田口賞)		50,000		
次年度繰越金			1,844,207		
総計			1,894,207		

資料２：2007年度会計の上期実績および下期計画（2007年1月1日～12月31日）

一般会計

大項目	小項目	2007年度					
		予算	上期実績	下期見通し	決算予定	増減	コメント
収入	賛助会費	120,000	100,000	100,000	200,000	80,000	前年度分回収
	個人会費	300,000	121,000	140,000	261,000	-39,000	
	ROG販売	2,000	2,060	0	2,060	60	
	シンポジウム剰余金	40,000	36,697	40,000	76,697	36,697	松本剰余金＋金沢協賛金
	利子	20	379	60	439	419	
	計	462,020	260,136	280,060	540,196	78,176	
前年度繰越金		747,781			1,069,561	321,780	
総計		1,209,801			1,609,757	399,956	
支出	ROG印刷費	400,000	346,710	400,000	746,710	-346,710	前年度分支払い
	送料	30,000	1,950	25,000	26,950	3,050	
	HPオンライン化維持費	50,000	0	60,000	60,000	-10,000	
	シンポジウム予備費	40,000	0	40,000	40,000	0	
	事務局経費	30,000	0	30,000	30,000	0	
	雑費	30,000	550	20,000	20,550	9,450	
	計	580,000			924,210	-344,210	
次年度繰越金		629,801			685,547	-55,746	
総計		1,209,801			1,609,757	-399,956	

田口基金

大項目	小項目	2007年度					
		予算	上期実績	下期見通し	決算予定	増減	コメント
収入	利子	159,338	127,499	0	127,499	31,839	利子に対する税金
前年度繰越金		1,844,207			1,844,207	0	
総計		2,003,545		0	1,971,706	31,839	
支出	副賞(田口賞)	50,000	0	50,000	50,000	0	
次年度繰越金		1,953,545			1,921,706	31,839	
総計		2,003,545			1,971,706	31,839	

資料3：2008年度会計計画（2008年1月1日～12月31日）

一般会計

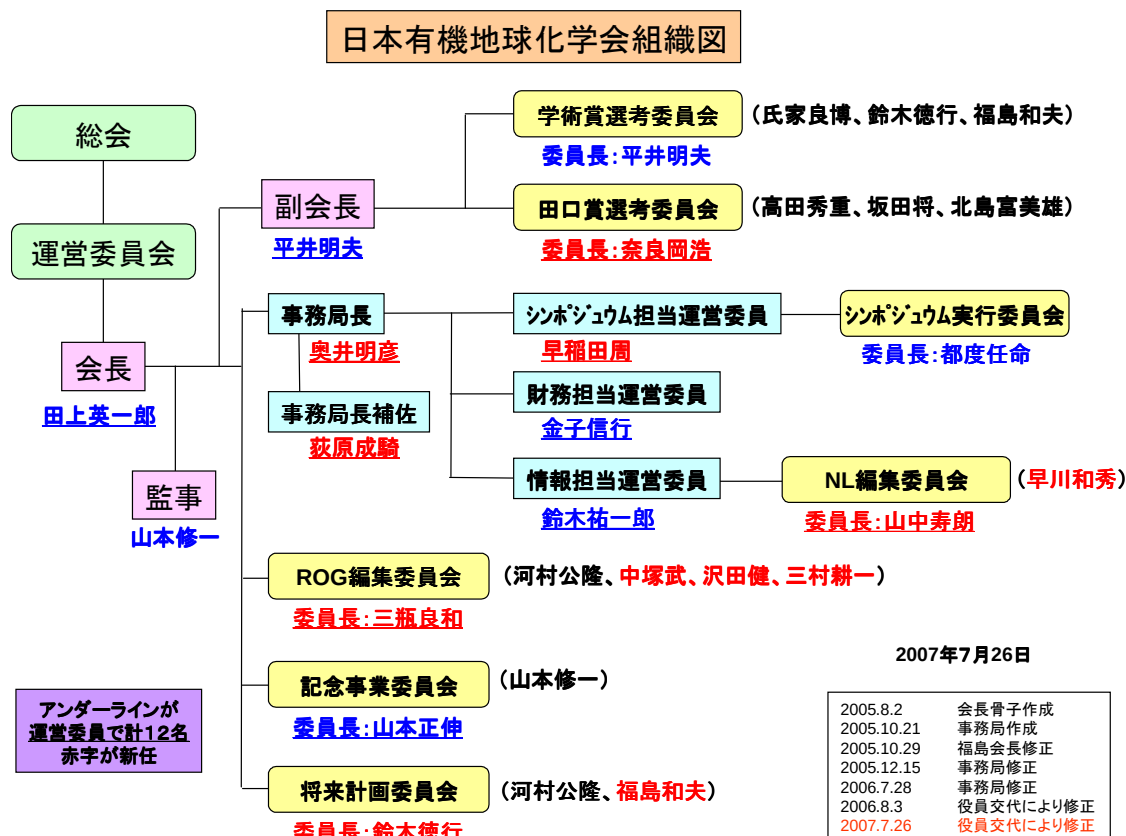
大項目	小項目	2006年度 決算	2007年度 決算予定	2008年度 予算	コメント
収入	賛助会費	40,000	200,000	100,000	5口
	個人会費	218,000	261,000	240,000	
	ROG販売	2,000	2,060	2,000	JOGMEC
	シンポジウム剰余金	152,423	76,697	40,000	
	利子	60	439	500	
	計	412,483	540,196	382,500	
前年度繰越金		747,351	1,069,561	685,547	
総計		1,159,834	1,609,757	1,068,047	
支出	ROG印刷費	0	746,710	400,000	Vol. 21実績346,710円
	送料	14,230	26,950	30,000	
	HPオンライン化維持費	53,970	60,000	60,000	
	シンポジウム予備費	0	40,000	40,000	
	事務局経費	0	30,000	30,000	
	雑費	22,073	20,550	30,000	
	計	90,273	924,210	590,000	
次年度繰越金		1,069,561	685,547	478,047	
総計		1,159,834	1,609,757	1,068,047	

ROG印刷費を繰上げた場合の計 436,983 577,500

田口基金

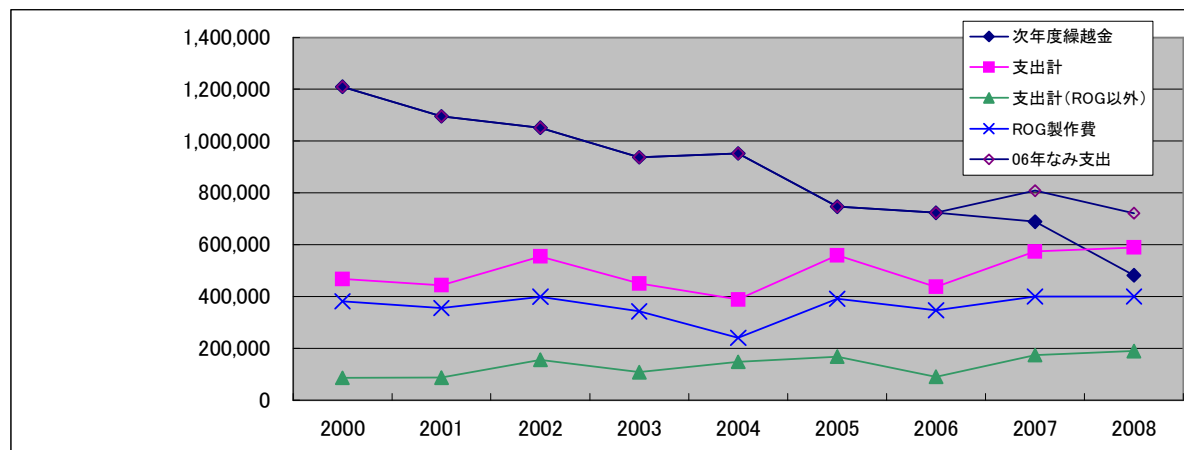
大項目	小項目	2006年度 決算	2007年度 決算予定	2008年度 予算	コメント
収入	利子	5	127,499	500	
前年度繰越金		1,894,202	1,844,207	1,921,706	
総計		1,894,207	1,971,706	1,922,206	
支出	副賞(田口賞)	50,000	50,000	50,000	
次年度繰越金		1,844,207	1,921,706	1,872,206	
総計		1,894,207	1,971,706	1,922,206	

資料4：学会の新体制図



資料 5 : 学会の財務状況変化

支出項目	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
ROG製作費	683,990	381,370	355,950	399,000	342,840	240,975	391,570	346,710	400,000	400,000
送料	81,400	60,300	49,740	44,180	20,230	25,140	44,565	14,230	23,550	30,000
HPオンライン化維持費			30,000	68,250	49,350	61,530	87,360	53,970	60,000	60,000
シンポジウム予備費								0	40,000	40,000
事務局経費					30,000	30,000	30,000	0	30,000	30,000
雑費	30,375	26,054	7,577	43,142	7,343	2,640	4,608	22,073	20,550	30,000
手数料					602	917	1,232			
学術賞関連						27,712				
支出計	795,765	467,724	443,267	554,572	450,365	388,914	559,335	436,983	574,100	590,000
支出計(ROG以外)	111,775	86,354	87,317	155,572	107,525	147,939	167,765	90,273	174,100	190,000
次年度繰越金	1,338,317	1,209,749	1,096,052	1,051,466	937,681	952,033	747,351	723,281	688,947	481,447
計	3,041,622	2,231,551	2,069,903	2,316,182	1,945,936	1,877,800	2,033,786	1,687,520	2,011,247	1,851,447



People

若手研究者の紹介コーナー「People」です。

退官シンポジウムと自分

東京大学大学院工学系研究科附属水環境制御研究センター
真名垣 聡 (研究員)



[退官記念シンポジウム]

およそ若手紹介に似つかわしくないタイトルとなりましたが、自分の研究生生活の中で多大な影響を受けた方が 2007 年に退官され、そのシン

ポジウムがありました。この出来事が研究を振りかえるきっかけを与えてくれましたのでここからはじめます。2007 年 8 月にボストンで開催されたアメリカ化学会環境化学部門主催のシンポジウムに参加しました。このシンポジウムはスイス連邦環境科学・技術研究所 (EAWAG) の Walter Giger 教授の退官に伴い開催されたものです。彼は有機汚染物質の環境動態に関してこの種の研究がマイナーな頃から数十年間続けてこられました。また Environmental Science and Technology の Editor の一人としても貢献された方です。テーマが近いこともあって研究を始めて最初に読んだ論文が彼のグループからのものでした。一般的にこの時期に手に取った論文は印象に残るものですが、例外無く私も影響を受け、論文が出ると今でも必ずチェックしています。今回は公で話を聞く最後のチャンス

かもと思い、半ば自分の好きなスポーツ選手を見るような感覚でそのスピーチをチェックしていました。英語とお酒のおかげで全部聞き取れていたか疑問ですが、研究を支えた家族や同僚への感謝に始まり、自分の元に投稿された論文の内8割はリジェクトしている等で皆を笑わせ、研究をおこなう上での自分のモチベーションとして「To measure is to know」と笑いながらも力強く語っていたのが印象に残りました。

[自分]

自分に話を戻します。私は人為起源有機物質（化学物質）の環境動態について研究をしています。一般的に化学物質というと汚染という言葉と密接に結びつきますが、自然界にもともと存在しないことや、発生源や生産量がはっきりしている点を利用して、環境中での輸送や変質過程の理解等にも応用可能です。私はどちらかというと毒性や汚染よりそういった物質循環に支点を置いて研究をしています。

研究は大学4年から学位取得まで、東京農工大学・高田秀重先生の指導の元おこなってきました。研究室は有機汚染物質について幅広く研究をおこなっていて、大学時代より興味をもっていた分野でした。ただ所属を決めたのは授業が単純におもしろかったことによります。実際配属されると研究生活は叱咤激励の連続でしたが研究の面白さを丁寧に伝えてくれ、困ったことがあると今でも相談にのっていただいています。研究室に所属してからは沿岸域から外洋域

へ流出する人為起源有機物質（化学物質）の挙動をテーマとしました。現在、地球上には年間300×106トンの合成有機化学物質が水環境中へ放出されていると言われていますがその環境動態の知見は不足しています。特に当時、生活排水中に日常的に含まれる化学物質の一部が外洋へ流出していると考えられていましたが実際の観測データがほとんどありませんでした。そこで私は東京湾や相模湾を対象に沿岸域から外洋への流出量の概算及び水深1000m以上の深海堆積物中の検出を通して生活排水中に含まれる化学物質の一部が外洋へと流出していることを明らかにしました。これは一旦光、微生物分解を受けない環境に輸送されると、これらの化学物質も長距離輸送を経るということを示唆するものです。

現在は東京大学の水環境制御研究センター（古米弘明先生）に移り研究を続けています。分野の違いと研究室に留学生が多くいることもあって、新鮮な刺激をうけている毎日です。

自分はまだまだやるべきことは多いですが振りかえる折にはなにがしかの跡が残っていればと思います。皆様には垣根をこえて、これからもいろいろと指導いただければ幸いです。ぜひ声をかけてください。

写真はこんな時のために撮った珠玉の一枚です。シンポジウム会場にて：左より熊田英峰助教（東京薬科大学）、Walter Giger 教授（EAWAG）、高田秀重教授（東京農工大学）、筆者。

Report

23rd International Meeting on Organic Geochemistry (IMOG)に参加しました

出光オイルアンドガス開発（株）
奥井 明彦

IMOG は、皆様ご存知、水色表紙の Organic Geochemistry という雑誌を発行している European Association of Organic Geochemists が2年に一度主催している国際会議で、有機地球化学分野での最も大きなイベントのひとつと言えます。私も1995年のサンセバスティアン（スペイン）以来、2003年のクラコウ（ポーランド）を除いて皆勤賞です。今年は23回目にあたり9月9日～14日にイギリスの田舎町トーキーで開催されました。日本からも、北海道大、信州大やJAMSTECの方々をはじめとして10名ほどが参加されました。参加者を代表して私、奥井が、その様子を皆様にお伝えしたいと思います。



実は私は今回、現在共同研究を行っているベトナムの2名の方々と発表・参加することになり、まずロンドンのホテルに集合し、その後、ロンドン西部にありハリーポッターにも出て来るパディントン駅に向かいました。日本を出発する直前には台風が関東を直撃し1日出発を延ばしましたが、着いた9月のロンドンには爽やかで気温も暑くもなく涼しくもなく快適です。会議の後に帰ってきたロンドンでは、サッカーのプレミアリーグを観戦しました（コアな話をしますと、有名なモウリーニョ監督が辞めるきっかけになったチェルシーの試合です）が、まさに「屋外でサッカーを観ながらのビール」がぴったりの気候です。

パディントン駅では、北海道大の学生さんや知り合いのノルウェーの研究者に会ったりして次第に気分が盛り上がって来ます。トーキーはイングランド島の南西側の海岸にある（一応）リゾート地で、イギリスのリビエラと呼ばれています。ロンドンから列車で約4時間のデボン州というところにあります。そうですあの「デボン紀」のデボンです。イギリス南岸は地質学の発祥の地と言いますか、各時代の **Type Locality** があるところで、石油地球化学分野では余りにも有名な、上部ジュラ系の **Kimmeridge Clay**（北海油田の根源岩）を見ることもできます。

日曜日の午前中にロンドンを経つローカル列車に乗っている人は余り多くなく、イギリス人以外の顔立ちで（ポスターの入った）筒を持っていればお互いに視線は合います。どこから来たのか？何を発表するのか？など、ゆったりと走る列車の中で時間を持て余せば、自然と会話が始まるものです。こういう場面は国際学会でのひとつの醍醐味かもしれません。お互いに同じ目的（敵）を相手に意気投合でしょうか。列車が遅れるとか、トラブルがあればさらに共同作業、そして仲良くなるものです（何度か経験があります）。

午後にトーキー駅に着き、目の前のホテルにチェックインして、まず街をひと回り。海岸に **Old Red Sandstone** が露出しているのを横目に、学会の会場も確認します。リゾートというよりは避寒地という響きが合いそうな、どこことなく寂しさも漂う小ぢんまりとした街です。夕方からは **Registration** および **Ice Breaker Party**。海岸にあるホテルの海に見えるテラス。バンドの演奏などもあり、既に大盛り上がり。またニューキャッスル大学の輪とかオクラホマ大学の輪なんかもできています。同窓会を兼ね、そしてネットワーキングもこのような国際学会の目的のひとつです。そう言えば、別の日に **Shell** などの石油会社が大規模な **Reception** を開催してしまし

た。不足している技術者の取り合いと言った様相です。

翌日から場所を **Conference Center** に移し、いよいよ5日間の学会が始まりました。参加者550名以上。しかもそのほとんどが発表を行うという大規模なもの。口頭発表は午前ひとつの会場、午後は2つの会場に分かれて行われ（大体、**Biogeochemistry** と **Petroleum Geochemistry** に分かれる）、その間にポスター発表がありました。この報告では内容が多岐にわたりますので、詳細は触れませんが、会議のホームページからアブストラクト集がダウンロードできるので、興味ある方は以下まで (<http://www.imog2007.org/index.htm>)。

長年参加しているとわかるのですが、口頭発表は大体有名どころ、そして各国からの代表がひとりずつ行うという感じです。じつは私も2001年のナンシー（フランス）で口頭発表に選んで頂きましたが、それ以外はポスター発表です（この時は会議開催中の9/11にニューヨークでのテロがあり、会場が大騒ぎとなりました）。今年の **IMOG** では **Jamstec** の大河内さんが日本代表として口頭発表を行われました。私もそうですが、日本人ですので英語での口頭発表は緊張するものなのですが、大河内さんは、時折、“**Well**”とか、**Native** ぼい合いの手をご自分で入れながら、全く落ち着いて発表をされました。実に堂々としたもので、自分の過去の姿を猛省しながら誇らしく思ったものです。

私の専門である **Petroleum Geochemistry** についての印象を述べておきますと、やはり少し停滞気味という印象を受けました。余りブレークスルー的な話もなく、口頭発表も、**Curiale**、**Moldowan**、**Peters**、**Later** などの常連によるレビュー発表がほとんどです。1980年代までは、**Shell** や **Exxon** などのメジャー石油会社が独自の研究所を持ち、予算と研究者を投入して精力的に活動を行ったため、多くのブレークスルーがなされました。上で述べた常連もこの時に石油会社に入ったばかりのバリバリの研究者だった訳です。ところが1990年代以降、原油価格が低迷したため、これらメジャー石油会社は研究予算を縮小。研究所を閉鎖し研究者をリストラしました。一部の優秀な研究者が大学に移り、細々と最先端の研究を継承して来た訳です。ところが今頃になって、その時の影響がボディーブローのように効いて来ているなあ、という印象を持ちました。それに比べて **Biogeochemistry** 分野は勢いがあって、好対照という印象でした。

IMOG の一番の楽しみは全参加者が集う **Conference Dinner** です。会議の丁度真ん中、水曜日の夜にバスに分乗して会場に向かいます。

毎回趣向を凝らした Dinner になりますが、今回の会場はターキーから車で30分ほどの古城で開催されました。入口で民族衣装を着た一団に迎えられ、演奏や踊り観ながら軽い飲み物を受け取ります。そして喉を潤しながらまず古城の見学です。見学が終わると庭に出るのですが、そこに用意されていたのは、何と 550 名全員が入ることができる巨大なテントです。びっくりしました。この中で Dinner が行われということでは中に入り、私は共同研究者のベトナムの方、中国や台湾の研究者、そしてドイツの方々と同じテーブルに座りました。後はゆっくり食事をしながら、自己紹介、そしてそれぞれの国や仕事の話と盛り上がり行きます。食事が終わったのが夜 10 時ぐらい。実はここからが本番です。バンド演奏が始まって、会場の前はディスコと化して行きます。IMOG の Conference Dinner は、いつも夜中過ぎの午前 1～2 時まで続きますが、私は最後まで居たことは一度もありません。また恒例として、Conference Dinner の翌朝一番の口頭発表は、超有名人と決まっています。そして今回も夜中過ぎまで踊ったはずなのですが、多くの人が会場に集まっていました。

簡単ではありますが、IMOG の様子を報告し

て来ました。IMOG は既に International ということになっており、今まではヨーロッパのみで開催されて来ましたが、日本で開催することも可能だそうです。国際会議を主催する大変さを認識しつつ、このような暖かく楽しい会議が日本でも開催できれば良いなあ、と思いつつ帰国の途に付きました。尚、次回は 2009 年 9 月にドイツのブレーメンで開催されるという発表がありました。次回は「ブンデスリーガ」を楽しみに、ということです。



Information

有機地球化学賞(学術賞)2008 年度受賞候補者推薦の募集

有機地球化学賞(学術賞)2006 年度受賞候補
選考委員会 委員長 平井 明夫

有機地球化学賞(学術賞)受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：有機地球化学の研究分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による(自薦他薦を問いません)。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、郵送または PDF ファイル等の E-mail 添付送付の郵送または PDF ファイル等の E-mail 添付送付の事。

1) 候補者の履歴(学歴、大学卒から。職歴、その他)

2) 推薦の対象となる研究題目および推薦理由

3) 研究業績目録(推薦の対象となる主要な論文 10 編)

4) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2008 年 5 月 31 日(土)(当日消印有効)

提出および問い合わせ先：〒151-8565 東京都渋谷区幡ヶ谷 1-31-10 帝国石油(株)技術評価部

平井明夫 電話：03-3466-1247,

ファクシミリ：03-3468-3509

E-mail：a_hirai@teikokuoil.co.jp

「有機地球化学賞(学術賞)の過去の受賞者についての情報は、日本有機地球学会ホームページでご覧下さい。」

研究奨励賞(田口賞)2008 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞(田口賞)2008 年度受賞候補
選考委員会 委員長 奈良岡 浩

研究奨励賞(田口賞)受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が1974年4月2日以降で、有機地球化学、石油地質学、堆積学の3分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による(自薦他薦を問いません)。推薦の方法：下記の事項をA4サイズ用紙に任意の形式で記入し、郵送またはPDFファイル等のE-mail添付送付の事。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷り又はコピー
- 4) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2008年5月31日(土)(当日消印有効)

提出及び問い合わせ先：〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1 岡山大学理学部地球科学科
奈良岡 浩 電話：086-251-7887、
ファックス：086-251-7895、
E-mail：naraoka@cc.okayama-u.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については
<http://www.ogeochem.jp/prize1.htm#taguchisho> (日本有機地球化学会 HP「学会概要」) をご覧ください。

ROG への投稿原稿を募集中！！

Researches in Organic Geochemistry
編集委員長 三瓶 良和

ROG (Researches in Organic Geochemistry) は本学会の学会誌で、有機地球化学およびそれに関連する論文を掲載し、年1回発行しています。2007 年総会の後、奈良岡編集委員長からバトンタッチしました。会員の皆様に役立つ出版物にしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

12 月末に Vol. 22 を発行予定(受賞記念総説 1 編、論文 2 編、技術論文 2 編)で、現在 Vol. 23 に向けて原稿を募集中です。カテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(note)、3) レター (letter)、4) 技

術論文(technical paper)、5) 総説 (review)です。有機地球化学シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文の一部の発表も歓迎いたします。詳細は、ROG Vol. 21 の巻末の投稿規定をご参照ください。なお、編集委員会へのご意見・ご要望等もお待ちしておりますので、併せてよろしくお願いいたします。

ご投稿は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿：
sampei@riko.shimane-u.ac.jp

郵送：〒690-8504 松江市西川津町 1060

島根大学総合理工学部

三瓶 宛(TEL:0852-32-6453, FAX: 0852-32-6469)

2008 年年会費納入のお願い

会員の皆様には日頃よりご支援いただき、誠にありがとうございます。事務局から 2008 年の年会費の納入についてご協力をお願いいたします。年会費は一般会員 2000 円学生会員 1000 円となっております。末頁に記載の郵便口座までお払い込みをお願いいたします。ご自分の最終納入年度がわからない等ご不明の点がございましたら、どうぞ遠慮なく事務局までお問い合わせください。また、職場や自宅を移動された方

は名簿作成と郵便物配布のために新しいご住所、電話番号、ファックス番号を下記までご連絡下さい。また、E-mail アドレスをお持ちの方は、ニュースレターのメール配信等のため、差し支えない限り E-mail アドレスを事務局までお知らせいただくようお願いします。

郵便振替口座：00110-7-76406

名義人：日本有機地球化学会

発行責任者 有機地球化学会 会長 田上 英一郎

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院 環境学研究科

Phone: 052-789-3470, Fax: 052-789-3436

日本有機地球化学会事務局（移転しました）

〒105-0001 東京都港区虎の門 2-2-5 共同通信会館

出光オイルアンドガス開発（株）技術室内

事務局長 奥井 明彦

Phone: 03-5575-0347 Fax: 03-5575-0350

e-mail: secret08@ogeochem.jp

編集者 山中寿朗（岡山大学大学院自然科学研究科）早川和秀（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）

e-mail: news@ogeochem.jp

編集後記：皆様の寄稿をお待ちしております。

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。

アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>